

第21章から第24章

『資本論』第5篇第21章 利子生み資本

ここでは、「利子生み資本」を、資本主義生産を前提とした「貨幣を生む貨幣」として、「可能的資本としての貨幣」として、その流通のし方とその商品としての売られ方が論究されています。

「利子生み資本」の流通のし方・運動形態は譲渡と返済という貸借の運動であり、生産的資本の循環過程という現実の運動の中では、資本が資本として存在するのは、労働力の搾取過程の中だけのことであるが、資本としての商品である「利子生み資本」は、はじめから、資本として、利潤を創造するという使用価値をもつ価値として貸し出される。(大月版『資本論』P428、以下ではページのみ表記する)

その利子率には、「自然的」な率というものは存在しないので、競争によって強制されるよりほかに他の法則はない。(P445)

※第21章427ページの「貨幣資本」は生産的資本の循環過程の中の貨幣を言っている。「本来の貨幣資本」を表現していることは、自明なことである。

第22章 利潤の分割 利子率 利子率の「自然的な」率

『資本論』は、この章の冒頭で、次のように述べています。

「この章の対象も、およそ後の諸章で取り扱われるすべての信用上の現象も、ここで細目にわたって研究することはできない。……われわれがここでしようとするのは、ただ、利子生み資本の独立な姿と利潤にたいする利子の独立化とを展開するということだけである。」(P447)

このようなスタンスで、まずはじめに、利子の「最高限界」と「相対的最低限」に触れたあと、「総利潤」と「利子」とのあいだに相関関係があると仮定すれば、「利潤率の高さは資本主義的生産の発展に反比例するのだから、したがってまた一国の利子率の高低も産業的発展の高さにたいしてやはり反比例するということになる」(P449)と、利子が一般的利潤率によって規制されることを述べる。つづいて、「利子率と景気循環との関係」(関係あり)や、「利子率が利潤率の変動にはまったくかわりなしに低落する傾向」の主な二つの原因として、金利生活者の階級の増大と信用制度の発達をあげている。(P452)

このように、利子の自然的な率というものは存在せず(P453)、借り手の提供する担保の種類によって、また貸付期間の長短によっても利子率そのものが変化すること(P457)を述べています。

これらを踏まえ、利子率と利潤率との相違について、利子率は、貸付可能な貨幣資本の供給と需要がその都度の利子の市場水準を決定し、需要供給関係によって直接に規定され、その都度確定されるが、利潤率(一般的利潤率)は、複雑な諸原因の結果として、不断の変動を通じて、利潤の最低限界として現れるだけであることを論及しています。

なおここで、「貨幣資本」が、大工業の発展につれて、「社会的資本を代表する銀行業者の統制のもとに置かれ」、一方で「大量にまとまった貸付資本として」供給され、他方で資本の需要の重みにしたがって資本家階級のあいだに分配される、という「信用制度」の課題が呈示されます。これが、第25章、第27章でくりかえし呈示され、深められてい

きます。あたかも交響曲が進行するように。

同時に、（後の仕上げのための覚え書）として、第 25 章以降で本格的に論究する「支払手段としての貨幣の機能」をになう「商業信用」の役割が簡単につづられています。これから本格的に論究する「信用制度」というテーマを視野において、どのような文章構成を考えていたのか、興味は尽きません。

そして、こんにちの先進国の“産業の空洞化と低金利とマネーの狂乱、を目の当たりにして、「利潤率の高さは資本主義的生産の発展に反比例するのだから、したがってまた一国の利率の高低も産業的発展の高さにたいしてやはり反比例するということになる」という『資本論』の言葉は、現代のグローバル資本の展開の根拠を示すものです。

※第 22 章 461 ページの「貨幣資本」は、生産的資本の循環過程で使われる前提としての、「利子生み資本」のことであることも、文意に即して自明のことである。

第23章 利子と企業者利得

第 23 章は、「利子は、われわれがすぐ前の二つの章で見たように、機能資本家としての産業資本家や商人が、自分の資本ではなく借り入れた資本を充用するかぎり、この資本の所有者であり貸し手である人に支払わなければならないところの、利潤すなわち剰余価値の一部分にほかならないものとして元来は現れる」（P463）と、章の冒頭で、「利子」が「剰余価値の一部分にほかならないもの」であることを確認し、その「利子」とセットの関係にある「企業者利得」の資本主義社会での認識の幻想性とその根拠を明らかにしています。

若干スペースをとるが、大事な論点を含み、エセマルクス主義者のお気に入りのワードも出てくるので、見てみましょう。

『資本論』は、まず、「資本家が貨幣資本家と産業資本家とに分かれるということだけが、利潤の一部分を利子に転化させ、およそ利子という範疇をつくりだすのである。そして、ただこの二つの種類の資本家のあいだの競争だけが利率をつくりだす」（P463-4）ことを述べます。そして、このように「利子」と「企業者利得」とに分かれることによって、生産過程での労働者の搾取の結果である「利潤」が、「利子は資本自体の果実、生産過程を無視しての資本所有の果実」として、「企業者利得は、過程進行中の、生産過程で働いている資本の果実であり、したがって資本の充用者が再生産過程で演ずる能動的な役割の果実」としての外観をとり、「総利潤の二つの部分がまるでそれぞれ二つの本質的に違った源泉から生じたかのように互いに骨化され独立させられる」ことを明らかにします。

なお、この「利潤」の「利子」と「企業者利得」とへの分割は、第 7 篇第 48 章「三位一体的定式」へと繋がっていきます。

同時に『資本論』は、「競争だけが利率をつくりだす」からといって、「貨幣資本」全体について、「生産資本として機能しなくても、すなわち利子が単にその一部でしかない剰余価値を創造しなくても、利子を生むはずだ」と考えるのは、「もしも資本家のむやみに大きい部分が自分の資本を貨幣資本に転化させようとするならば、その結果は、貨幣資本のひどい減価と利率のひどい低落」とをもたらすので、大まちがいであることを述べ（P473）るとともに、「貨幣資本」が「利子」を得るのは、「貨幣資本」が「独立な力として、生きている労働力に対立しており、不払労働を取得するための手段になっている」からであるが、「利子生み資本そのものが自分の対立物としているのは、賃労働ではなく、

機能資本だから」、「利子という形態では、賃労働にたいするこのような対立は消えている」ことも明らかにしています。(P475)

『資本論』はつぎに「企業者利得」の幻想性の曝露に移ります。

大月版『資本論』の475ページでマルクスは「企業者利得は、賃労働にたいして対立物をなしているのではなく、ただ利子にたいして対立物をなしているだけである」と言っていますが、エセマルクス主義者が『資本論』の価値を低め、自らの偉大さを示すのに利用しても不思議ではない文章です。自らの誤った主張を党内に広めようとする不破さんは、目の上のたんこぶであるエンゲルスの価値を低めようとして誹謗中傷をふりまっていますが、そのうちの一つに、「プロレタリアートとブルジョアジーの対立というのは、資本主義の生産関係の一番の基本で、資本主義の発生の時点から始まっているものなのに、なぜそれが事態の発展のなかで明るみに出てくる現象形態なのか」(『前衛』No904(2014年1月号))とエンゲルスを攻撃しています。党員の無知を信じてエンゲルスを陥れる。同じように利用されそうな文章なので、つい、わき道にそれてしまいました。

詳しくはホームページ4-8「不破さんは、「プロレタリアートとブルジョアジーの対立」は「資本主義の発生の時点から」あるのに、事態の発展のなかで明るみに出るのは矛盾だと、自分の理解力のなさを根拠にエンゲルスを誹謗している」を参照して下さい。

「企業者利得は、賃労働にたいして対立物をなしているのではなく、ただ利子にたいして対立物をなしているだけである」ように見えるのはなぜか。「彼(機能資本家)の資本家としての機能は、剰余価値すなわち不払労働をしかも最も経済的な諸条件のもとで生産することにあるということは、完全に忘れられる」のはなぜか。それは、「資本家が資本家としての機能をなにもしないで単なる資本所有者である場合にも利子は資本家のものになり」、機能資本家は資本の被所有者であっても監督労働によって企業者利得をえるという、「二つの種類の資本家のあいだでの利潤の分割理由が、いつのまにか、分割されるべき利潤の存在理由に、あとでどのように分割されるかにかかわらず資本がそのものとして再生産過程から引き出す剰余価値の存在理由に、転化してしまう」(P476-7)からである。

こうして、資本主義社会の認識の幻想性と転倒性が完成する。

「企業者利得」について、もっと詳しく見てみよう。

「企業者利得には資本の経済的機能が属するが、しかしこの機能の特定な、資本主義的な性格(搾取する労働という——青山)は捨象され」(P480)、「監督や指揮の労働」の「どんな結合的生産様式でも行われなければならない生産的労働である」(P481)という側面だけが残し、このことによって、資本主義社会における正当で、社会的に必要な労働でもあるかのようにみなされることとなる。同じような関係は「奴隷制度」のもとでもみられることが述べられている。

そして、「信用の発展につれてこの貨幣資本そのものが社会的な性格をもつようになり、銀行に集中されて、もはやその直接の所有者からではなく銀行から貸し出されるようになることによって、また、他方では、借入れによってであろうとその他の方法によってであろうとどんな権原によっても資本の所有者ではない単なる管理者が、機能資本家そのものに属するすべての実質的な機能を行うことによって、残るのはただ権能者だけになり、資本家はよけいな人物として生産過程から消えてしまうのである」(P487)。

しかし、やはり、資本主義は資本主義である。「資本主義的生産の基礎の上では、株式

企業において、管理賃金についての新たな欺瞞が発展する。というのは、現実の管理者の横にも上にも何人かの管理・監督役員が現れて、彼らの場合には管理や監督は実際に、株主からまきあげて自分のもうけにするための単なる口実になるからである」(P489)。この事実は、相談役、会長等々として現代に生き、はばをきかせている。

おまけ、監督・指揮労働に関する不破さんの驚くべき謬論

以上が第23章のあらましですが、不破哲三氏は、「監督や指揮の労働」は「どんな結合的生産様式でも行われなければならない生産的労働である」(P481)という文章をヒントに、驚くべき「未来社会」像と「科学的社会主義」の理論を展開します。

不破さんは、「従来の社会主義論」について、「たいていが、生産物の分配どまり、経済的土台の変化だけに目を向けて、人間の発達という肝心なことが出てこないのです。だから「未来社会」といってもあまりうらやましくない」といって搾取から目を逸らせ、「未来社会」像として「指揮者はいるが支配者はいない、社会を夢みます。そして、マルクス・エンゲルスのいう「自由の国」とは「自由な時間」のことで、「未来社会」の社会変革の主体的条件は、自分自身のために使える「自由な時間」を使って人間が発達することであり、「社会主義社会」では「人間の能力の発達が社会発展の最大の推進力になってゆく」という唯物史観とはかけ離れた独創的な思想を吹聴しています。

同時に不破さんは、賃金が上がれば経済な発展すると、「経済的土台の変化」には「目を向け」ず、資本家の「生産物の分配」のわずかな譲歩で資本主義の矛盾が解決するかなような幻想をふりまきます。

残念ながら、このページは、このような不破さんの謬論にかかわりあう場ではありません。これらの不破さんの謬論についての詳しい説明は、ホームページ 4-16「☆不破さんは、エンゲルスには「過渡期論」が無いと言い、『国家と革命』と『空想から科学へ』は「マルクスの未来社会像の核心」を欠いていると誹謗・中傷する」、4-17「☆「人間の発達」は資本主義を社会主義に変え、生産力を発展させなければ保障されない」、4-20「☆「社会変革の主体的条件を探究する」という看板で不破さんが「探究」したものは、唯物史観の否定だった」及び 4-1「☆不破さんは、『賃金、価格、利潤』の賃金論を「ルールある経済社会」へ道を開いてゆく」闘いに解消し、『賃金、価格、利潤』を労働運動にとって何の意味もないガラクタの一つに変えてしまった」等を、是非、参照してください。

第24章 利子生み資本の形態での資本関係の外面化

この章は、第21章で示された「利子生み資本」の「貨幣を生む貨幣」としての商品の特質の一層の論究とそこから展開されるとんでもない作り話について書かれています。

『資本論』はまず、「利子生み資本」が「一定の期間に一定の剰余価値を生む資本」となることによって、「利子を生むということが貨幣の属性になり」、その発生の痕跡(利潤の分割とその源泉)を少しも残さないものとなることを述べる(P491)。そして、「利子生み資本」から利潤の源泉(搾取)は、もはや、認識できなくなっており、「利子生み資本」が資本主義的生産過程から切り離されて独立な存在となることによって、「生産関係の最高度の転倒と物化」、「資本の神秘化」が行われることを明らかにします(P492)。

このような「生産関係の最高度の転倒と物化」と「資本の神秘化」が、「資本とは、永久に存続し増大する価値としてのその固有の属性によって…(青山略)自分自身を再生産し

再生産のなかで自分を増殖する価値であるという観念は、錬金術師たちの空想も遠く及ばない作り話的な」思いつきを生み、「われわれの救世主が生まれた年に」「六%の複利で貸された一シリングは、全太陽系を土星の軌道の直径に等しい直径をもつ一つの球にした場合に包含できるであろうよりも、もっと大きい額の金に、増大しているであろう」などという主張を生むこと、そして、その主張の誤りが「生産関係の最高度の転倒と物化」と「資本の神秘化」にあることを、「過去の労働の生産物の価値の維持」や拡大は「それらの生産物と生きている労働との接触の結果でしかない」こと(したがって、「資本」と違って生産力は六%の複利では伸びないこと——青山)、「資本」が剰余労働を生み出すことができるのは資本主義的生産関係のもとでのことをあげて論駁しています(P495-501)。なお、この「資本の神秘化」は後の章で「資本の架空性」の問題として再度論じられます。

おまけ、「貨幣資本」について

また、大谷氏は第 25 章に関して、マルクスの草稿での「monied Capital」という言葉をエンゲルスが「貨幣資本」と訳したことについて、「エンゲルスは——ドイツ語での印刷用原稿を作るためにはやむをえなかったことではあるが——monied Capital等々も、ドイツ語(Geldkapital)に訳して統一した。そのために、原文のニュアンスが失われている場合もあるように思われる」(P103)と言って批判していますが、この章に興味深い記述がありますので紹介しておきます。

それは、大月版『資本論』493 ページの「こうして、利子生み貨幣資本では(そしてすべて資本はその価値表現から見れば貨幣資本であり、言い換えれば、今では貨幣資本の表現とみなされる)、貨幣蓄蔵者の敬虔な願望が実現されているのである」という文章です。

「利子生み資本」が「利子生み貨幣資本」と表現され、「利子を生むということが貨幣の属性になり」、「すべて資本はその価値表現から見れば貨幣資本である」ところの「貨幣資本」としての意味が、この文章から、『資本論』の読者に強く印象づけられます。資本主義社会での「貨幣」の「利子生み貨幣資本」としての普遍化の意味を、「貨幣資本」という言葉からしっかりとイメージすることが、私たちに求められています。そして、日本語の「貨幣資本」という言葉が、価値実現過程(生産的資本の循環過程)での「貨幣」という意味とともに「利子生み資本」としての「貨幣」という意味をもつことは、『資本論』第3巻を読めば、誰にでも理解できることのはずです。

第21章から第24章までに書かれていたこと

第 21 章から第 24 章までに書かれていたことは、「利子生み資本」の資本主義社会での定義づけです。そして、第 25 章から第 27 章では、「資本主義のもとで生まれた『信用』制度」によって資本がどのような運動をし、資本主義がどのように発展するのかを考察します。